

学生取材レポート

第17回京都教育懇話会

グローバル人材の条件―中国人留学生・研修生の最新事情に見る―

2011年10月26日に、立命館朱雀キャンパスにて第17回京都教育懇話会が開催された。経済活動のグローバル化に伴い、最近では人材のグローバル化も求められるようになった。日本には約8万6千人の中国人留学生がおり、数ヶ国語をマスターし、世界で活躍できる人材となっている。それに対し、日本人学生は留学に興味を持たず、国内企業に就職を希望、「内向き志向」が目立つ。そこで、企業・大学の視点から「グローバル人材の条件」とは何かを議論した。講師に、中国人留学生事情の専門家である株式会社世代継承活学社代表取締役の蔡龍日氏、京都府中小企業団体中央会副会長であり、株式会社オーランド代表取締役会長の安藤源行氏、立命館アジア太平洋大学事務局次長入学部担当の村上健氏を迎え、更に現在日本に留学中の中国人留学生、羅春愛さんと喬彬さんも交えて討議を行った。

第1部の問題提起では、蔡氏より「グローバル人材には、コミュニケーション能力、異文化を理解する心が必要不可欠だ。京都はこれまで多くのグローバル企業を育ててきたが、果たしてグローバル人材をも育てることができるのだろうか。」安藤氏より「各国の社会感の板挟みになるグローバル人材には精神力が絶対に必要だ。そして、信頼と信用は世界共通なので、個人の人間性と社会性を磨くことが重要なのではないか。」村上氏より「トリリンガルであることも珍しくない留学生達と、日本人も同じ土俵で戦わなければならない。日本人のグローバル化が課題となっている状況で、どのように世界と渡り合っていけばよいのだろうか。」とそれぞれのお立場から問題提起いただいた。

第2部のパネル討議では、日本人学生と中国人留学生の違いについて、「目の輝き、ハングリー精神の有無、表情が違う」という意見が多くあった。村上氏によると、大学で質疑応答の場面があれば、留学生たちの約7割が手を挙げるそうだ。日本人学生は、挙手をして発言することを敬遠しがちなので、この事例は日本人と中国人留学生の違いを顕著に表わしている。そして、中国人留学生の羅さんと喬さんは、日本人学生の内向き志向を常に感じているという。羅さんによれば、各国の学生とディスカッションをする時、日本人はいつも静かだそうだ。喬さんも、日本人はせっかく良い意見を持っているのに、発言しないことはもったいない、と述べた。このことについて安藤氏は、日本の阿吽の呼吸は世界の非常識。日本の遠回しな表現は世界では通じない、と述べた。日本ならではの「空気を読む」という行為が、グローバル人材への道を狭めているのかもしれない。これから益々加速していこうグローバル化。グローバル化とは、決して欧米化することでない。日本人の良いところを世界に発信していくことが、日本人がグローバル人材になることの近道なのではないだろうか。

【取材：立命館宇治高等学校二年生 横田遥香】